

## 『小町集』における「あま」の歌の増補について

著者	服部 友香
雑誌名	三重大学日本語学文学
巻	15
ページ	31-50
発行年	2004-06-20
URL	<a href="http://hdl.handle.net/10076/6616">http://hdl.handle.net/10076/6616</a>

# 『小町集』における「あま」の歌の増補について

服部 友香

## はじめに

後人の撰による『小町集』は、『古今和歌集』『後撰和歌集』の小町の歌に加えて小町真作歌であるとも言えないとも言えない歌、また明らかに小町作ではない歌を含むために、平安中期の「小町歌」や小町像の享受の実態を窺う事が出来る。本稿では『小町集』における「あま」を詠み込んだ歌を検討する事で、『小町集』において『古今和歌集』や『後撰和歌集』に見られる小町の歌がどのように享受されていたのか、またどうういう経緯で「あま」の歌が増補されていったのかを検討したい。まず現存する『小町集』の系統について言及しておく。

現存する『小町集』の伝本は次の三種に大別される。

- ① 冷泉家本……総歌数四十五首。『後撰和歌集』の小町歌が採歌されておらず、成立は②③よりも古いのではないかと考えられる。(注一)

- ② 神宮文庫本系統(異本系)……総歌数六十九首。冒頭から六二番歌までが本体で、それ以降の歌は後の増補によると考えられる。本体部分は③より成立年代が古いと考えられる。(注二)

- ③ 歌仙家集本系統(流布本系)……総歌数百十五首。冒頭から九九番歌までが本体で、次いで「他本歌十一首」「又、他本五首」が補われている。

以下、これらを「冷泉家本」「神宮文庫本」「歌仙本」の呼称で呼ぶこととする。

## 一、『小町集』の「あま」の歌

『小町集』に見える「あま」の歌のうち『古今和歌集』に小町作として入集するものは次の二首である。(注三)

みるめなきわが身をうらと知らねばや離れなで海人の足  
たゆくくる(注四)

〔『古今和歌集』卷第十三 恋三、六三番歌、冷泉家本』小町集』四番歌、神宮文庫本六番歌、歌仙本三三番歌〕

海人のすむ里のしるべにあらなくにうら見むとのみ人のいふらん(注五)

〔『古今和歌集』卷第十四 恋四、七二七番歌、冷泉家本』小町集』四一番歌、神宮文庫本七番歌、歌仙本一五番歌〕

また、『後撰和歌集』に小町作として入れられているものは次の一首である。

定めたる男もなく、物思侍ける頃

あまの住む浦漕ぐ舟のちをなみ世を海わたる我ぞ

悲き(注六)

〔『後撰和歌集』卷第十五 雜一、一〇九〇番歌、冷泉家本』小町集』なし、神宮文庫本五二番歌、歌仙本三三番歌〕

そしてこの三首の歌を核として、

みるめあらはうらみむやはとあまとはうかひてまたむうたかたのみも

(冷泉家本二九番歌、神宮文庫本三九番歌、歌仙本四一番歌) わたつうみのみるめはたれかよりはてし世の人ことになしといはする

(冷泉家本三四番歌、神宮文庫本一七番歌、歌仙本二三番歌) みるめかるあまのゆきかふみなどちになこそせきも我はずゑぬに

(冷泉家本三五番歌、神宮文庫本六〇番歌、歌仙本五番歌) かさまつあましかつかはあふ事のみるめもなしとは思はさらまし

(冷泉家本なし、神宮文庫本四二番歌、歌仙本二六番歌) 漕ぎ来ぬや天の風間も待たずしてにくさびかける海人の釣舟

(冷泉家本なし、神宮文庫本なし、歌仙本四四番歌)

世の中をいとひてあまの住むかたはうきめのみこそ見えわたりけれ(冷泉家本なし、神宮文庫本なし、歌仙本八九番歌)

春の日のうらくことを出てみよ何わざしてか海人は

過ぐすと(冷泉家本なし、神宮文庫本なし、歌仙本一〇四番歌) という「あま」関係歌(全七首)が増補されたと考えられる。

歌仙本『小町集』所収歌のうちで「夢」を詠んだものは十三首あるが、そのうち『古今和歌集』にあるものが六首と半分近くを占めているのに対し、歌仙本『小町集』所収の「あま」を詠んだ歌は十首あり、そのうち『古今和歌集』『後撰和歌集』に見えない歌の数は七首である。『古今和歌集』『後撰和歌集』に見えない「あま」の歌は冷泉家本においては三首、神宮文庫本においては五首であるが、冷泉家本、神宮文庫本に見える「あま」の歌は総て歌仙本と重複するものである。

故に歌仙本において、「あま」に関する歌が七首も増補されている(注七)というのは異例の量であると考えられる。これは一体何によるものであるのかを以下で考えてみたい。

二、「古今和歌集」の「あま」の歌

『古今和歌集』には、「我が身」の語を詠み込んだ小野小町の歌が四首ある。

花の色はうつりにけりないたづらにわが身世にふるながめせしまに

『古今和歌集』春下、一一三番歌 『小町集』冷泉家本三二

番歌、神宮文庫本二七番歌、歌仙本一番歌

みるめなきわが身をうらと知らねばや離れなで海人の足たゆくくる

『古今和歌集』卷第十三 恋三、六二三番歌、冷泉家本『小

町集』四番歌、神宮文庫本六番歌、歌仙本二三番歌

今はとてわが身時雨にふりぬれば事の葉さへに移ろひにけり

『古今和歌集』恋五、七八二番歌『小町集』冷泉家本六番歌、

神宮文庫本三二番歌、歌仙本三二番歌

秋風にあふたのみこそ悲しけれわが身むなしくなりぬとおもへば

『古今和歌集』卷十五 恋五、八二三番歌 冷泉家本『小町集』なし、神宮文庫本四一番歌、歌仙本二二番歌

がそれである。そのうち一一三、七八二、八二三番歌は我が身の衰え、空しさを詠んだものであり、恋人に顧みられない事及び女である事の辛さが読み取れる。しかし、六二三番歌

はこれらの歌と異なる雰囲気を持つものである。以下、それについて見て行きたい。

まず、六二三番歌に使用されている技巧を見る事にする。

すると第一句の「みるめ」の語は海藻の「海松布」と、会う機会の意味(注八)である「見る目」の掛詞となっている。「うら」「あま」は、「みるめ」の縁語である。

この歌の上二句は難解であり、二句目の「わが身」の語については古来様々な解釈がなされて来た。竹岡正夫氏は諸注釈書にみえるこの歌の解釈について、以下の四種に分類している注九。

- A 相手の男の身とするもの……頭註密勘・頭昭注頭書・両度開書・榮雅
- B 作者自身の身とするもの

(a) 見どころもなきみにくきわが身とするもの……

続万葉集秘説・正義・至文・全書

(b) わが身をみるめなき浦と知らねばや、の順序が正しいとするもの……遠鏡・鄙言

(c) このままで解そうとするもの……金子評釈・窪田評釈・大系

竹岡氏自身の解釈は、

海松藻のない浦と知らないから、それでうとくもならずに漁師が足もだるいほど来るのかしら―何度来たって見

る目(私に逢えるとき)のないおのが身をつらいと感じないから、それでうとくもならずにあの人が足もだるいほど通つて来るのかしら。

というもので右の分類においてはAの解釈であり、その理由として『後撰和歌集』の、

幾度か生田の浦に立帰浪にわが身を打濡らすらん

かけてだに我が身の上と思ひきや来む年春の花を見じ  
とは (哀傷、一四三番歌、伊勢)

の二首を挙げている(注十)が、片桐洋一氏によれば、『古今和歌集』の「我が身」の用例の中に相手の身を「我が身」と詠んだ例は無いという(注十二)。また「我が身」を詠んだ『古今和歌集』所収の他の小町歌三首においては、何れも「我が身」は自分自身を指す。また、ここでは海辺の情景と自分たちの関係が掛詞によって二重写しとなるように詠まれているのであるから、「あま」を相手の男と考えると、足たゆく通う対象である「わが身」とは詠み手の小町を指していると考えるのが自然であろう。以上の事から私はB(C)の解釈を取りたい。そしてその「わが身」は「うら」であるという。「うら」に「憂」が掛けられていると考えると、この歌の解釈は、「貴方にお会いする機会が無い私のこの身の憂さを貴方はご存知ないのでしようか、海人が海藻さえも生えていない浦に足がだるくなく

る程通つて来るように、貴方は私の元へ足がだるくなる程に通つていらつしやいます」となるであろう。するとこれは恋人との間に何らかの障害があり、逢う事が出来ない状況であるにも関わらず、男が熱心に通つてくる事を詠んでいるのではないかと考えられる。しかし「足たゆく来る」という語からは相手の行為を揶揄する姿勢も読み取られ、これを贈答歌と考えると小町は相手の男の気持ちに於ける驕慢な女であつたという解釈も生じてこよう。『新編全集』はこの歌について、

小町にこのような歌があるので、深草少将の百夜通いの説話が生まれたのだろうか。(注十二)

としている。後世の人々はこれを小町の真情と取った。この歌と『玉造小町子壮衰書』に登場する当時の人々に小町と見なされた女の驕慢な姿勢とが結合し、謡曲『通小町』『卒塔婆小町』に見える、深草少将に百夜通いをさせる高慢な小町像が生まれたのだろうと木戸久二子氏は述べている(注十三)。

しかし、これは真情の吐露ではないだろう。「あま」もしくは「みるめ」の題詠と見るべき歌であろう。想像を逞しくするならば、小町は「仁明天皇の文化サロンの人」(注十四)であつたと考えられるから、食用の海藻である「海松布」が朝廷に献上された際に詠まれたものではないかと考えられる。『大和物語』三十段には、「亭子の帝に、紀伊国より石つき

たる海松をなむ奉りけるを題にて、人々歌よみけるに」という記述がある。「亭子の帝」は宇多天皇をいう。このように、献上された「みるめ」を題にして宮廷の人々が歌を詠むという事はあつたと考えてよいであろう。

さて、「みるめ」という語は『萬葉集』に見えず、『古今和歌集』以降使用され始めた語である。その中でも、

伊勢のあまの朝な夕なに潜くてふ見るめに人を飽くよし  
も哉 (恋四、六八三番歌、詠み人しらず)

は、『萬葉集』に類歌、

伊勢乃白水郎之 朝魚夕菜尔 潜云 鱧貝之 獨念  
荷指天 (卷十一、二七九八番歌)

(イセノアマノ アサナユフナニ カツクテフ アハヒノカヒノ  
カタオモヒニシテ——萬葉古点)

があり、また、

神風之 伊勢乃海之 朝奈伎尔 来依深海松 暮奈藝尔  
来因俣海松… (卷十三、三三〇一番歌)

とあつて、萬葉歌の影響が少なくないと考えられ、『萬葉集』の時代に比較的近い時代に作られた歌であろうと考えられる。

また、

大方はわが名もみなと漕ぎいでなむ世をうみべたに見る  
め少なし (『古今和歌集』六六九番歌、よみ人しらず)

という歌もある。ここでは、「みるめ」が少ない事が詠まれて

いる。恐らく小町はこれらの『古今和歌集』詠み人知らず歌を前提に作歌を行ったのであろう。「みるめなき」は六六九番歌の「見るめ少なし」、「離れなであまの足たゆく来る」は、六八三番歌の「朝な夕なに潜く」を想起させる語でもある。

次の歌を見よう。

海人のすむ里のしるべにあらなくにうら見むとのみ人の  
いふらん (七二七番歌)

この歌では、「うらみむ」に「浦見む」と「恨みむ」が掛けられている。故にこの歌は、「私は漁師の住む里の案内人ではないのに、どうしてあの方は「うらみむ」とばかり言うのでしょうか」という意であり、言葉遊びの感が強い。すると自分を恨んでいる相手を揶揄しているとも取れ、そこから読み取れるのは驕慢な小町像であるが、これも真情の吐露ではないと考えられる。

佐藤卓司氏(注十五)は小町歌を私的な宴席で詠まれたものではないかと推測している。氏の推論については疑問もあるが、七二七番歌を宴席歌であるとするこの歌における小町の姿勢が理解出来るのである。一人の男性が戯れに、「つれない貴方を恨みます」と云う歌を詠みかけ、小町はこの歌によつて応じたのではなからうか。それならばこの態度にも納得が行く。「浦の近くにある漁師の里の案内人ではないのです

から、そんなに恨む恨むと云われたって困ります。」そう返し  
たこの歌は、機知に富んだ宴席の返歌なのではないだろうか。  
以上、『古今和歌集』の「あま」を題材とした小町歌二首に  
ついて見てきた。他の小町歌にはない相手を揶揄するような  
表現は題詠や宴席であるが故のものであり、そこから読み取  
れるのは小町の機知に富んだイメージである。巧みな掛詞と  
縁語表現が使用されているこれらの歌が得意即妙に詠まれた  
ものであるとすると、彼女の歌人としての実力は明らかだと  
言える。

### 三、『後撰和歌集』と『小町集』—小町像の享受—

#### ① 語の共通性

次に『後撰和歌集』に小町作として入れられている歌、

定めたる男もなくて、物思侍ける頃

あまの住む浦漕ぐ舟のちをなみ世を海わたる我  
ぞ悲き

(『後撰和歌集』巻第十五 雑一、一〇九〇番歌、冷泉家  
本『小町集』なし、神宮文庫本五二番歌、歌仙本三三番

歌)

を見てみると、想起されるのは『古今和歌集』の「あま」の  
歌から読み取れる情景とは異なった心象である。

この歌は「うみ」に「海」と「憂み」が掛けられており、

「漁師が住むその浦を漕いでゆく舟が漕ぐ舟の櫂を無くして  
為す術が無いように、どうする事も出来ず頼りなく悲しい思  
いで世間という海を渡る私は悲しい事です」という意である。  
ここから読みとれるのは、か弱い、悲しみに沈んでいる小  
町の姿であり、先に参照した『古今和歌集』の我が身の衰え  
や空しさを嘆く歌や、

わびぬれば身をうき草の根をたえて誘ふ水あらば去なむ  
とぞ思

(『古今和歌集』雑下、九三八番歌『小町集』冷泉家本二番歌、  
神宮文庫本三二番歌、歌仙本系三八番歌)

のように、「身をうき」即ち「憂き」という語を詠み込んだ歌  
という、男性に対して受け身でいざるを得ない女であるが故  
の悲しみに沈む小町像を想起させるものである。

だが『後撰和歌集』一〇九〇番の小町の歌は、「あまの住む」  
及び「うら」という語や掛詞を多様化した技巧が『古今和歌集』  
の小町歌を思わせる為に小町作とされたものではないかと考  
えられる。勿論、小町作とされた理由は語の相似だけではな  
い。『古今和歌集』の小町の歌から読み取れる女であるが故の  
憂愁に沈む小町像は、『古今和歌集』仮名序の、

小野小町は、古の衣通姫の流なり。哀れなる様にて、  
強からず。言はば、好き女の悩める所有るに似たり。強  
からぬは女の歌なればなるべし。

という記述に要約されるものだと考えられる。そして貫之が小町の歌から読み取った、「哀れなる様にて、強からず」という小町像が仮名序の享受により「か弱い小町」のイメージを人口に膾炙させ、その結果、「か弱い小町」のイメージに当てはまり、また『古今和歌集』七二七番歌と表現が類似している『後撰和歌集』一〇九〇番歌が小町作とされてしまったのではないかと考えられるのである。

『小町集』の「あま」を詠んだ歌も、同じような経緯で『小町集』に撰ばれたものであると考えられる。

まず、『小町集』の最も古い形を留めていると考えられる冷泉家本にその存在が確認出来る事から、早い時代から小町作歌と考えられたものであると思われる二首について見てみる事にする。

みるめあらはうらみむやはとあまとはうるかひてまたむ  
うたかたのみも

(冷泉家本二九番歌、神宮文庫本三九番歌、歌仙本四一番歌)  
みるめかるあまのゆきかふみなとちになこそせきも我  
はすゑぬに

(冷泉家本三五番歌、神宮文庫本六〇番歌、歌仙本五番歌)  
冷泉家本二九番歌においては「みるめ」「うら」「あま」、三五番歌においては、「みるめ」「あま」という『古今和歌集』所収の小町歌に使用されているのと同じ単語が使用されてい

る。そして二首共に『古今和歌集』六二三番歌と同じように「あま」は相手の男の比喩であり、「みるめ」は「見る目」と「海松布」の掛詞である。また冷泉家本二九番歌の「うらみ」は『古今和歌集』七二七番歌と同じように「恨み」と「浦見」の掛詞である。これは恐らく、これらの歌の作者が『古今和歌集』の小町歌を本歌として作歌を行った事を示しているよう。

しかしながらこの二首は、相手を拒む姿勢を持つ『古今和歌集』六二三番歌とは違い、男を待つ女性の歌である。二九番歌においては逢瀬を待つ女の憂愁が表現されている。また、三五番歌においては「なこそその関など据えてはおりません」と詠むことで、来ない男に対して、私は拒んではおりませんにどうして来てくれないのでしょうか、と歌っている。「かる」は「刈る」と「離る」の掛詞であろう。逢う機会が無くなった事をこのように表現しているのである。この二首においては相手の男は「足たゆく」なる迄通つて来るのではなく、女は男に逢いたいと切望している。

すると、これらは男の訪れを待つ事しか出来ない女であるが故の憂愁を詠んだ歌であり、語句及び技巧が『古今和歌集』の小町歌と共通する事が分かる。それ故に小町的な歌であると見なされ、『小町集』に入れられたのではなからうか。

田中喜美春氏（注十六）は、『小町集』は『古今和歌集』及び『後撰和歌集』所収の小町歌と表現が類似する歌を採歌し、

増補を行ったのではないかと述べている。私はそこに仮名序に見えるような「か弱い小町」像の介在も関係していると考えたい。そして更に、『古今和歌集』『後撰和歌集』の小町の歌と語が共通し、「か弱い小町」のイメージを持つ歌が『小町集』に採歌される事によつて「小町作歌」と認識され、その中で使用されている語が共通する歌が『小町集』に採歌されるという増補の過程を経ているのではなからうか。その単語の例としては、

みるめかゝるあまのゆきかふみなとちになこそせきも我  
はすゑぬに

（冷泉家本三五番歌、神宮文庫本六〇番歌、歌仙本五番歌）

と、

わたつうみのみるめはたれかゝりはてし世の人ことにな  
しといはする

（冷泉家本三四番歌、神宮文庫本一七番歌、歌仙本二三番歌）

に共通する、「みるめ」を「かゝる」という表現及び、

かさまゝつあましかつかはあふ事のみるめもなしとは思  
はさらまし

（冷泉家本なし、神宮文庫本四二番歌、歌仙本二六番歌）

と、

漕ぎ来ぬや天の風間も待たずしてにくさびかける海人の  
釣舟

（冷泉家本なし、神宮文庫本なし、歌仙本四四番歌）

に共通する「風間」「待つ」が挙げられよう。「みるめ」を「かゝる」に關しては、この語が使用されている『小町集』所収歌は共にその初出が冷泉家本である為、どちらが先に『小町集』に採られたかは分からないが、「風間」「待つ」についてはかさまゝつ」歌の『小町集』初出が神宮文庫本であり、「漕ぎ来ぬや」の歌の初出が歌仙本である事から、「かさまゝつ」歌の方が採歌された年代が早いと考えられる。

これらの歌の内容を見てみると、「みるめかゝる」の歌は先に述べた通り男の訪れがない事を嘆く歌であり、「わたつうみの」歌も、「みるめ」即ち逢う機会が失われてしまった事を詠んでいる。「かさまゝつ」歌では、「あま」に例えられる男は海に潜る為に風間、即ち風の絶え間を待っているだけであるとする。自分たちの関係がほんのかりそめのものである事を表現しているのである。「漕ぎ来ぬや」の歌では、「天の風間も待たず」荒れた海をやって来る「あま」が詠まれており、障害があるにも関わらず男がやって来た事への喜びが表現されているよう。故にこれらは皆、男を待つ事しか出来ない弱い存在である女の思いが詠まれていると考えられる。

## ②語の改変

以上、『後撰和歌集』及び『小町集』の「あま」の歌が「か弱い女」としてのイメージと、小町作と考えられた歌との表

現の共通性を持つてゐる故に小町の歌とされたのではないかという事を述べて来た。そして、そうした理由で採歌された歌を、先に『小町集』に撰ばれていた歌の単語を挿入して改変し、より「小町的」な歌にすることが行われたのではないかと考えられる。以降、それについて見ていきたい。

それではまず、右に記した、

かさまゝつあましかつかはあふ事のみるめもなしと思  
はさらまし

(冷泉家本なし、神宮文庫本四二番歌、歌仙本二六番歌)

を見てゆく。

この歌は歌仙本では、

風間待つ海人し潜かば逢ふことの頼りになみはうみと  
成なん

となつてゐる。この歌の傍線部は『後撰和歌集』一〇九〇番歌の「かぢをなみ世をうみ」と表現が類似している。

恐らく神宮文庫本の本文が本来の形であり、「あま」「みるめ」という語の共通性によつて『小町集』に入れられる事となつたのであろう。しかし自らの身の憂さを嘆く方がより「小町的」であるとの理由から、『後撰和歌集』一〇九〇番歌の語句「なみ」「うみ」を使用した歌に改変されたのではないか。次に、三種類の『小町集』全てに見える長歌について見てみよう『小大君集』の長歌を参照併記する。

A あしたつなどいひてかくれたるひとのあはれなる  
に

ひさかたの そらにたなひく うきくもの うける我身  
は 露草の つゆの心も またきえて おもふことのみ  
まるこそすけ しけさはまさる あらたまの とると月日  
は くるの日の 花のほひも 夏の日の このした風  
も 秋のよの 月のひかりも ふゆのよの しくれのお  
とも 世中に 恋もわかれも うきことも つらきをし  
れる 我みこそ 心にしみて そてのうへの ひるとき  
もなく あはれなり かくのみつねに おもひつゝ い  
きのまつはら いたるに なからのはしの なからへ  
てせにゐるたつの なきわたり いかうきみの み  
くさみの 我みにかけて かけはなれ いかこひしき  
くものうへの 人にあひみて このよには おもふこと  
なき みとはなるへき (冷泉家本二五番歌)

B あしたつの雲みの中にましりなはといひてうせにし

人の、あはれにおほえしころ

ひさかたの 空にたゝよふ うき雲の うける我身は  
露くさの 露の命も またきえて 思ふことのみ まる  
こそすけ しけさはまさる あらたまの 行年月の 春の

日の はなの匂ひも なつの日の 木の下風も あきの  
よの 月のひかりも 冬の夜の しくれの音も 世の中  
に 恋もわかれも うきことも つらきをしれる わか  
みこそ 心にしみて 袖のうらの ひる時もなく あは  
れなれ かくのみつねに おもひつゝ いきの松はら  
いきたるや なからのはしの なからへて せにゐるた  
つ の なき渡り うらく舟の めれわたり いつかう  
きみの みくさみの わか身にかけて かけはなれ い  
つか恋しき 雲のうへの 人にあひみて このよには  
おもふことなき 身とはなるへき (神宮文庫本五八番歌)

C 「葦鶴の雲井の中に交じりなば」などいひて失せたる

人のあはれなるころ

ひさかたの 空にたなびく 浮き雲の 浮ける我身は  
露草の 露の命も また消えて 思ふことのみ 丸小  
菅 繁さはまさる あらたまの 行く年月は 春の日の  
花の匂ひも 夏の日の 木の下陰も 秋の夜の 月の  
光も 冬の夜の 時雨の音も 世の中に 恋も別れも  
憂きことも つらきも知れる 我身こそ 心に染みて  
袖のうらの 干る時もなく あはれなれ かくのみ常に  
思ひつゝ 生の松原 いくたるに 長柄の橋の ながら  
へて 瀬にゐる鶴の 島渡り 浦漕ぐ舟の 濡れわたる

いつか憂き世の くにさみの わが身かけつゝ かけは  
なれ つか恋しき 雲の上の 人にあひ見て この世  
には 思ふことなき 身とはなるべき (歌仙本六七番歌)

D あしたづのくもあのかなかにまじりなば、などいひて

うせたる人、あはれにおもほゆるころ、ながうた  
ひさかたの そらにたなびく うきくもの うけるわが  
身は つゆくさの つゆのいのちも たまきえて おも  
ふことのみ もろこすげ しげさぞまさる あらたまの  
ゆくとし月の 春の日は はなのにほひも なつの日も  
このしたかげも 秋の夜の つきのひかりも 冬のよの  
しぐれのおとも よのなかに こひもわかれず うきこ  
とは つらきもしらぬ わが身こそ こころにしみて  
そでのうらの ひるときもなく あはれなれ かくのみ  
つねに おもひつゝ いきのまつばら いくたる夜 な  
がらのはしの ながらへて せにゐるたづの なきわた  
り いつかうきよの みくさのみ わが身にかけて か  
けはなれ つかこひしき くものうへの 人とおひ見  
て このよには 思ふことなき 身とはなるべき

『小大君集』一四二番歌

以上三種である。細かな異同は幾つか有り、例えばA、C、  
Dにおける第二句は「空にたなびく」であるが、Bのみ「空

にたゝよふ」とする。またCが第三十六句を「瀬にゐる鶴の島渡り」とするのに対し、A、B、Dは「せにゐるたづのなきわたり」とする。しかし、最も大きな差異は、A、Dはこの第三十六句の次に「浦漕ぐ舟の 濡れわたる」を含まない点である。

片桐洋一氏は冷泉家本『小町集』の解題において、この本が『後撰和歌集』の小町歌を含まない事を述べ、「この唐草裝飾本の原本は『後撰集』から小町関係歌を採歌する以前に形をなしていたということになり、その始発は意外に古いという見方もできそうである。」(注十七)と述べている。またDの『小大君集』にこの歌がある理由は、神宮文庫本『小町集』の系統の本の末尾が『小大君集』の末尾に誤って付けられた為である(注十八)。『小大君集』の増補部分を除く末尾は次のようになっている。

…長歌(前出)…  
おきのあて身をやくよりもわびしきはみやこしまへのわかれなりけり (二四二番歌)  
よひよひのゆめのたましひあしたかくありかでまたんとぶらひにこよ (二四四番歌)  
みるめかるあまのゆききのみなとちになこそせきもわれはすゑぬに (二四五番歌)

だいこの御ときに、日でりのしければ、あまこひ

のうたよむべきせんじありて  
ちはやぶる神もみまさばたちさわぎあまのとがはのひぐちあけたへ (二四六番歌)

やり水にさくらのはなながるるを見て  
たきのみづこのもとちかくながれずはうたかたはなをあらと見ましや (二四七番歌)

小大君 父母不詳

三条院春宮之時女蔵人左近

これに対して、神宮文庫本『小町集』は次のようである。

…長歌(前出)…  
よひくくに夢の手枕あしたかくありとて又もとぶらひにこよ (五九番歌)  
みるめかるあまのゆききのみなとちになこそせきも我すへなくに (六〇番歌)

たいこの御時に、日でりのしければ、あまこひのうたよむへきせんしに

千はやふる神もみまさはたちさきはきあまのとかはのひぐちあけたへ (六一番歌)  
瀧の水このもとちかくなかれすはうたかた花をあわとみましや (六二番歌)

これは『小大君集』一四三番歌の、

おきのあて身をやくよりもわびしきはみやこしまへのわ

かれなりけり

以外は全て神宮文庫本『小町集』と重複するものである。

この一四三番歌は『古今和歌集』墨滅歌(二二〇四)に小町作として入れられているものであり、故に原『小町集』には存在していたと考えられる。しかし書き写される過程で落とされてしまつて、現在のような形になつたのであろう。すると『小大君集』が断片的に伝える神宮文庫本『小町集』は現存する神宮文庫本『小町集』よりも古い姿を伝えている貴重な逸文であるという事になる。

これらの事から、長歌における「浦漕ぐ舟のぬれわたり」の二句を欠いた形の方が古いと考えられる。この「浦漕ぐ舟」の語は『後撰和歌集』の次の小町の歌によつたものであろう。

定めたる男もなくて、物思侍ける頃

あまの住む浦漕ぐ舟のかちをなみ世を海わたる我ぞ

悲さ

〔後撰和歌集〕雜一、一〇九〇番歌、『小町集』冷泉家本なし、

神宮文庫本五二番歌、歌仙本三三番歌

また、「ぬれわたり」も同じく『後撰和歌集』の小町の歌、

男の気色をやうくつらげに見えければ 小町

心からうきたる舟に乗りそめて一日も浪に濡れぬ日ぞな

き

〔後撰和歌集〕恋三、七七九番歌、『小町集』冷泉家本なし、

神宮文庫本四七番歌、歌仙本二番歌

によるものであると考える事が出来るであらう。

しかしこのAとDの長歌は、冒頭から二十九句目の「あはれなれ」迄は五七調であるが、三十句目の「かくのみ常に」からは七五調に変化するので、元々は二十九句目迄で終わっていたものを後人が増補したものであろうと考えられるのである。(注十九)

### ③ 「くささみの」

次に、長歌AとCに見える「くささみの」「みくささみの」という語について論じてみたい。「くささみの」を『和歌文学大系』の脚注は未詳とするが、片桐洋一氏は「くささび」の誤写と解しておられるようである(注二十)。「くささび」は歌仙本『小町集』に一例、

漕ぎ来ぬや天の風間も待たずしてにくささびかける海人の

釣舟 (冷泉家本なし、神宮文庫本なし、歌仙本四四番歌)

があるのみである。この歌は歌仙本にしか見えない事から、長歌の「くささみ」を「にくささび」と解して増補したものであると考えられる。

「にくささび」の語は、『八雲御抄』卷第三に、「にくささび 海舟にかくる物也」とあり、「荷楔」と漢字を当てる事が出来るであらう。大槻文彦氏の『大言海 改訂版』(注二十一)には、

にくさび(名) (荷櫻ノ義ニテモアルカト云フ) 船

ノ兩ノ舷ヲ、藁ニテ包ミカコヒテ、波ヲ避クルモノニテ、  
今モ、肥後ニテハ云フト云フ。ニクサミ。(後略)

にくさみ(名) 前條ノ語ニ同ジ。(後略)

とあり、「にくさび」と「にくさみ」が同じものである事が解  
る。すると「くにさみ」という語は「にくさみ」の「に」と  
「く」が転倒してしまったものであると考えられそうである。

この語が詠み込まれた和歌としては『万代和歌集』に、

にくさみぞ掛くべかりける難波瀉舟打つ波にいこそ寝ら  
れね  
(雑四、三四〇一番歌、能因法師)

があるが、『能因法師集』にはこの箇所は、

津のかみやすまさの朝臣となにはえに同船にて詠み  
ける

みくさとぞかくべかりける難波瀉船うつ浪にいこそねら  
れね  
(二五五番歌)

となっている。

右の諸例から、A、Bの「みくさみの」やDの「みくさの  
み」は「にくさみの」の単なる誤写であるとも考えられる。

しかし「浦漕ぐ舟のぬれわたり」を欠いた形がこの歌の原  
型であるとする、この箇所は元々「にくさみの」ではな  
かった可能性がある。「にくさみ」は「船」の語があつて初め  
て意味を持つ語である。「にくさみ」及びその誤写と考えられる

語の用例が『古今和歌集』『後撰和歌集』『拾遺和歌集』に見  
えないことも考慮しなければならない。更に『能因法師集』  
には、

夢に小野小町わかをかたる、そのこと葉にいはいく

まてといひしときよしかねてあかなくにかへらん君とな

げきしものを

(六三番歌)

とあり、その次に、

代田詠之

よそにこそやへのしらくもと思ひしかふたりが中にはや  
立ちにけり

(六四番歌、『小町集』 冷泉家本九番歌、神宮文庫本八番歌、

歌仙本九番歌)

と、『小町集』に見える歌を載せている。故に能因は『小町集』  
を享受し、「漕ぎ来ぬや」の歌から連想して「にくさみ」とい  
う語を使用したとも考えられよう。

それではこの箇所は、元々どのような語であつたのであ  
るか。これを私は、長歌Dの形、即ち「みくさのみ」ではな  
いかと考える。「みくさ」の語は、

昔者之 舊堤者 年深 池之 激尔 水草 生家里

春去者 水草之上尔 置霜乃 消乍毛我者 戀度鴨

(卷三、三七八番歌)

(卷十、一九〇八番歌)

等と『萬葉集』に見え、水辺に生える草の意味である。この語は平安期以降においても使用され、『古今和歌集』には、わが門の板井の清水里とをみ人し汲まねば水草おひにけり  
(神遊びの歌、一〇七九番歌)

とあり、『源氏物語』夕顔の巻にも、「みな秋の野らにて、池も水草に埋もれたれば」と見える。この「みくさ」の語だと見ると、長歌のこの箇所は「いつかうきよの 水草のみ わが身にかけて」となり、『古今和歌集』九三八番歌、

わびぬれば身をうき草の根をたえて誘ふ水あらば去なむとぞ思

『古今和歌集』雑下、九三八番歌 『小町集』冷泉家本二番歌、神宮文庫本三二番歌、歌仙本三八番歌

や、『小町集』所収歌、

あやめ草人になたゆとおもひしは我身のうきにおふるなりけり (冷泉家本一番歌、神宮文庫本一番歌、歌仙本四五番歌)との関係が窺われることとなるのである。

「菖蒲草」の歌は「ね」に便りという意味の「音」と「根」、「うき」に泥深い所という意味の「溼」と「憂き」を掛けている。「溼」は『古今和歌六帖』に、

うき

あしねはうきはうへこそつれなければはえならずおもふこころを (二六八八)

何ごともいはれざりけり身のうきはおひたるあしの木の  
みながれて (二六八九)

あしの木のよわき心はうきことにまづをれふして根ぞな  
がれける (二六九〇)

という用例が見え、何れも葦の「根」と共に詠まれている。また、

村上御時、上にのぼりて侍りけるに、上おほとのも  
りにければ帰りをりてよみ侍りける 斎宮女御  
かくれ沼におふるあやめのうきねしてははつれなくな  
る心かな (『後拾遺和歌集』雑一、八七一番歌)

局並びにすみ侍けるころ、五月六日もろともにながめ明かして、朝にながき根をつゝみて、紫式部

につかはしける

なべて世のうきになるゝあやめ草今日までかゝるねはいかゞ見る (『新古今和歌集』夏、二三三番歌、小少将

のように菖蒲を詠む際に菖蒲の「ね」と共に掛詞として詠まれている例も見える。上東門院小少将

この歌は『古今和歌集』九三八番歌と「身」「うき」「根」と云う語が共通し、また『古今和歌集』の小町歌一一三番歌、六二三番歌、七八二番歌、八二二番歌に見える「我が身」と

いう語を詠んだものである事、そして心が離れてゆく男の事を詠んだものであるから『古今和歌集』仮名序の小町評であ

る「哀れなる様にて、強からず」及び「好き女の悩める所有るに似たり」に当てはまり、それ故に『小町集』に採られたと考えられる歌である。冷泉家本及び神宮文庫本『小町集』に巻頭歌として置かれているという事実からは、「我が身」を詠む「あやめ草」の歌が小町真作歌以上に「小町的」であった事が窺われよう。

想像を逞しくするならば、この長歌の「水草」とは水辺に生える菖蒲を指しているのかも知れない。すると「いつかうきよの 水草のみ わが身にかけて」の「うき」は「菖蒲草」の歌と同じく、泥を意味する「溼」と「憂き」の掛詞で、「みくさ」には「水草」と、憂き世を見ろという意味の「見」が掛けられていると考えられよう。すると「憂き事ばかりを見せるこの世で、溼に生える水草だけを自分の身にかけて」と解する事が出来るであろう。これが恐らく本来の姿だと考えられる。それが「浦漕ぐ舟の ぬれわたり」という『後撰和歌集』小町歌の語句の増益から舟の縁語である「にくさび」とされるようになったものである。元々この長歌は詞書にあるように自分の前から姿を消した男を「あはれ」と思う女の気持ちが続られたものであり、男を待つ女の哀しみを詠んでいる故に「小町的」なものとされて採歌されたものであるうと考えられるが、この長歌をより「小町的」なものとする為に、『後撰和歌集』の小町の歌の単語「浦漕ぐ舟の ぬれわ

たり」を挿入して「憂き」という単語により深い意味を持たせ、歌の世界を広げるといふ事が行われたのではなからうか。但し、『相模集』に、

…(前略)のなかのみづも いとどしく みくさのみゐ  
て たえぬれど よしやかけても…(後略)

(五九三番歌)

と、この長歌の原型と考えられるものと類似した表現がある長歌が見え、その中には「このうらの ひるまもみえず」や「身をうきふねと こがれつつ ゆくへもしらぬ 心ちして」という表現もあることから『小町集』の長歌の影響が窺えるのであるが、この歌においては「みくさ」と「身をうき船」が併存しており、「にくさみ(び)」の語がさほど知られていないものである為に、「浦こぐ船の ぬれわたり」を挿入した後もこの箇所を「みくさ」と理解する事が行われていたのではないかと考えられる。

以上の次第から『小町集』の「あま」の歌の増補は次のように行われたと推測される。まず『古今和歌集』『後撰和歌集』の「あま」を詠んだ小町歌三首と語の共通性を持ち、「あはれなるやうにて、つよからず」という『古今和歌集』仮名序に描かれた小町像をイメージさせる内容を持つ歌を「小町的」なものとして見なして『小町集』に採歌する事が行われる。そし

て撰ばれた歌の中の単語がまた「小町的」な単語と見なされて新たな歌を撰ぶ際のキーワードとなった。このようにして撰ばれた歌は、時にはより「小町的」となるように語句を変えられて『小町集』に入れられていく。こうしたことを繰り返す事によって『小町集』に多くの「あま」の歌が入れられていったものであろう。

#### 四、小町のイメージと「あま」

それでは何故、『小町集』に「あま」という語を詠んだ歌がこれ程迄に多いのかについて考えてみたい。

まず第一に、『古今和歌集』における小町の「あま」の歌二首が題詠及び宴席詠であった為、他の小町歌と異なる姿勢を持つているという事が挙げられよう。『古今和歌集』所収歌から読み取れる小町像は、夢の逢いを求め我が身の容色と人の心の移ろいを嘆き、憂愁に沈む姿であり、これは女である事の哀しさを体現した歌となっている。故に小町は、「あま」の歌においても相手に逢う事を拒絶するのではなく、心が離れてゆく相手への嘆きを詠むべきだと後の人々は考えたであろう。「哀れなる様に、強からず」と言われる女性が詠むのであれば、男を揶揄する歌よりも来ぬ男を待ち続ける歌の方が相応しいのである。故に、『古今和歌集』の「あま」の歌における態度を修正し、本来在るべき姿を詠み込んだ歌として

多くの「あま」を詠んだ歌が『小町集』に撰ばれたのではないか。

また、「あま」及び海辺の情景に対する当時の認識が反映しているのではないかと考えられる。

第一に、「あま」は寄る辺なき存在でもある。それは海の上で危険な作業を行う故であると共に、以下のような要素も指摘できる。時代は下るが『和漢朗詠集』下巻、「遊女」の項に、

白波の寄するなぎさに世をすぐす海人の子なれば宿もさ  
だめず（七二番、海人詠）

とあり、海人というものが海浜であてどなく生きる存在である事、また海人と遊女との関わりをも読み取る事が出来る。遊女は、『本朝文粹』卷九所収の江以言「見遊女」（三三八）に、

維舟門前、遅客河中。

とあるから、海人と同じく舟の上で生きる女性であった事が解る。

そして『和漢朗詠集』の「海人詠」（下、七二番）は『源氏物語』夕顔帖にも、

「つきせず隔てたまへるつらさに、あらはさじと思ひつるものを。いまだに名のりし給へ。いとむくつけし」との給へど、「海人の子なれば」とてさすがにうちとけぬさま、いとあひだれたり。（依拠本、一・二二〇頁）

と引かれており、『和漢朗詠集』よりも早い時期にこの歌が人

口に膾炙していた事を窺わせる。石橋敏男氏は『小町集』の原型の成立を西暦一〇〇八年頃と推定する(注二二)が、するとその時点で「あま」という語は寄る辺ない身の上を想起させる語と理解されていたと見て良いのではなからうか。そしてそれは、「海」「浮き」という単語との掛詞によつて詠み込まれる「憂」の語と相俟つて寄る辺ない女の身のはかなさ、辛さを想起させたと考えられるのである。小町は、男の心変わりを嘆く歌や「さそふ水」に身を委ねて何処へなりとも流されてゆこうと詠んだ歌を作っている。故に、「寄る辺のない女」と見なされたのではないか。『後撰和歌集』一〇九〇番歌の詞書が、「定めたる男もなくて、物思侍りける頃」であるのは、そうした認識の反映であろう。

第二に、海辺は男と巧く行かなかつた女が隠れ住む場所であるという認識が当時あつたと考えられる。『源氏物語』帚木帖の雨夜の品定めにおいて左馬頭は次のように語る。

(前略) 艶(えん)もののはちして、うらみ言ふべきことも見知らぬさまに忍びて、上はつれなくみさをつくり、心ひとつに思あまる時は、言はん方なくすごき言の葉、あはれなる歌を詠みをき、しのばるべき形見をとりめて、深き山里、世離れたる海づらなどにはひ隠れぬるおりかし、童に侍しとき、女房などの物語読みしを聞きて、

(後略) …

(依拠本、一・四一頁)

ここからは、『源氏物語』以前の物語において、「深き山里」と共に「世離れたる海づら」が女の隠遁する場所であつたという事が読み取れる。以上のような「あま」と海辺に関する認識も「あま」の歌の増補に反映しているのではなからうか。

#### おわりに

以上、「小町集」の「あま」の歌について見てきた。『古今和歌集』の、題詠や宴席で詠まれたであろう「あま」の歌一首が彼女の真情として享受されたが故に、伝説的な小町像が作り上げられていったのであろう。それが謡曲に見られる「拒む女」としての小町であつた。

しかし一方、和歌の世界では「哀れなる様にて、強からず」という『古今和歌集』仮名序で提起されたコメントにより、「か弱い女」「待つ女」の小町像が出来上がり、『小町集』においてそれを反映した多くの歌が増補される事となつた。「あま」の歌に見える彼女の矛盾した二つの顔は、享受によつて作り上げられたものであると考えられるのである。

#### 注

注一…冷泉家本『小町集』の位置付けについては、財団法人冷泉家時

雨亭文庫編 冷泉家時雨亭叢書第二十卷『平安私家集』七(朝日新聞社、一九九九年)の解題(片桐洋一氏)によった。

注二…杉谷寿郎「歌人・小野小町」勅撰集と家集」(『解釈と鑑賞』60巻8号、一九九五年八月)

注三…以下の歌の表記は、典拠を示した最初の歌集によった。

注四…神宮文庫本は「つねにうらむる人に」、歌仙本は「常に來れど、え逢はぬ女の、恨むる人に」という詞書を持つ。

注五…神宮文庫本の本文は「おなしころ」(その前に位置する「みるめなき」の歌と同じ時期に作られたという事であろう)という詞書を持ち、本文は、

あまの住里のしるへにあらねどもうらみんとのみ人のいふらん

となつてゐる。歌仙本は「人のわりなく恨むるに」という詞書を持つ。

注六…神宮文庫本は詞書を持たず、歌仙本は「さだまらずあはれなる身を嘆きて」という詞書を持つ。

注七…ただし、七例目に出した「春の日の…」の歌は歌仙本において、当初の本体部ではない、「他本歌」からの増補としてある十一首中の一首である。

注八…「みるめ」の語には容貌の意味もあり、故に次の注九で掲げる竹岡正夫氏の分類のB(a)に見られるように「みるめなき」を「見てころもなきみにくきわが身」とする解釈もあるが、『古今和

歌集』における「みるめ」の用例は全て「逢う機会」の意で使用されており、また、

大方はわが名も水門こぎいでなむ世をうみべたに見るめ少な

〔古今和歌集〕六六九番歌、よみ人しらず

ある所に近江といひける人のもとにつかはしける

潮満たぬ海と聞けばや世とともみるめなくして年のへぬら

〔後撰和歌集〕五二八番歌

消息しばくつかはしけるを、父母侍て、制し侍れば、

え逢ひ侍らで 源善の朝臣

あふみてふ方のしるべも得てし敬見るめなきこと行きて

うらみん 〔後撰和歌集〕八五八番歌、源善

のように『古今和歌集』『後撰和歌集』の「みるめなき」の語と、それに類似した語は全て「逢う機会」のみの意味しか持たない事から、ここでも「逢う機会」の意味とした。

注九…竹岡正夫『古今和歌集全評釈』下(右文書院、一九七六年)

注十…同右

注十一…片桐洋一『古今和歌集全評釈』中(講談社、一九九八年)

注十二…小沢正夫、松田成徳校注 新編日本古典文学全集11『古今和歌集』(小学館、一九九四年)

歌集』(小学館、一九九四年)

注十三…木戸久二子「伊勢物語の古注における小野小町」(『中古文学論攷』第十一号、一九九〇年)

注十四…片桐洋一『小野小町追跡』(笠間書房、一九七五年)

注十五…佐藤卓司『歌謡的和歌と歌の場(推論)——小町歌中心に——』

『北海道大学論集』一〇四号、二〇〇〇年七月)

注十六…田中喜美春『小町時雨』(風間書房、一九八四年)

注十七…注一に同じ。

注十八…注十四に同じ。

注十九…二十七句目をA、Bでは「袖の浦の」とする。「袖の浦」は

三島由佳氏によれば出羽国の歌枕で、現在の山形県酒田市宮野浦  
であるという(『歌ことば歌枕大辞典』)。勅撰集における「袖の浦」  
の初出は、

君恋ふる涙のかゝる袖のうらはは巖なりとも朽ちぞしぬべき

〔拾遺和歌集〕恋五、九六一番歌)

である。しかし冷泉家本において、「そでのうらの」の箇所は「そ  
でのうへの」となっており、袖の上の涙が乾く間もないという意  
味となっている。即ち、この箇所の原型は歌枕「袖の浦」ではな  
かったのである。「そでのうへ」が誤写され、Aの歌仙本やBの神  
宮文庫本に見える「そでのうら」となったと考えられる。

〔ひめまつりの会編〕平安和歌歌枕地名索引(大学堂書店、一九七  
二年) 久保田淳、馬場あき子編『歌ことば歌枕大辞典』(角川書店、  
一九九九年)

注二十…注十四に同じ。

注二十一…大槻文彦編『大言海 改訂版』(富山房、一九五六年)

注二十二…石橋敏男『小町集成立考』(東京教育大学国語国文学会『國

語』第四卷一号、一九五五年八月)

テキスト

『小町集』

冷泉家本——財団法人冷泉家時雨亭文庫編 冷泉家時雨亭叢書第二十

卷『平安私家集』七(朝日新聞社、一九九九年)。翻刻がなぐ、

翻字は筆者による。

神宮文庫本——和歌史研究会編『私家集大成』第一卷 中古一(小町

II) (神宮文庫本) (明治書院、一九七三年)

歌仙本系——室城秀之他、校注 和歌文学大系18『小町集・遍昭集・

業平集・素性集・伊勢集・猿丸集』(明治書院、一九九八年)及び、

和歌史研究会編『私家集大成』第一卷 中古一(小町I) (正保

版本歌仙歌集) (明治書院、一九七三年) による。

『萬葉集』——佐竹昭広他編『補訂版 萬葉集 本文篇』(瑞書房、一

九九八年)

『古今和歌集』——小島憲之、荒井栄蔵校注 新日本古典文学大系5

『古今和歌集』(岩波書店、一九八九年)

『後撰和歌集』——片桐洋一校注 新日本古典文学大系6『後撰和歌

集』(岩波書店、一九九〇年)

『古今和歌六帖』——新編国歌大観 編集委員会『新編 国歌大観』

第二卷 私撰集編 歌集(角川書店、一九八四年)。担当、橋本不美男・相馬万里子・小池一行。

『大和物語』——高橋正治他校注 新編日本古典文学全集12『竹取物語 伊勢物語 大和物語 平中物語』(小学館、一九九四年)

『小大君集』——「新編国歌大観」編集委員会『新編 国歌大観』第三卷 私家集編I(角川書店、一九八五年)。担当、久保木哲夫。

『拾遺和歌集』——小町谷照彦校注 新日本古典文学大系7『拾遺和歌集』(岩波書店、一九九〇年)

『源氏物語』帚木帖——柳井滋他校注 新日本古典文学大系19『源氏物語』一(岩波書店、一九九三年)

『源氏物語』夕顔帖——柳井滋他校注 新日本古典文学大系19『源氏物語』一(岩波書店、一九九三年)

『和漢朗詠集』——菅野禮行校注 新編日本古典文学全集1『和漢朗詠集』(小学館、一九九九年)

『能因法師集』——「新編国歌大観」編集委員会『新編 国歌大観』第三卷 私家集編I(角川書店、一九八五年)。担当、小町谷照彦。

『相模集』——「新編国歌大観」編集委員会『新編 国歌大観』第三卷 私家集編I(角川書店、一九八五年)。担当、斎藤照子。

『本朝文粹』——大曾根重介他校注 新日本古典文学大系27『本朝文粹』(岩波書店、一九九二年)

『後拾遺和歌集』——久保田淳、平田喜信校注 新日本古典文学大系

8『後拾遺和歌集』(岩波書店、一九九四年)

『新古今和歌集』——田中裕、赤瀬信吾校注 新日本古典文学大系11

『新古今和歌集』(岩波書店、一九九二年)

『八雲御抄』——片桐洋一編 研究叢書110『八雲御抄の研究 枝葉部

言語部 本文編・索引編』(和泉書院、一九九二年)

『万代和歌集』——安田徳子校注 和歌文学大系14『万代和歌集』(明治書院、二〇〇〇年)

### 参考文献

佐佐木信綱他『校本萬葉集』十一(岩波書店、一九三二年)

前田善子「異本小町家集について——神宮文庫所蔵異本三十六人家集及び架蔵異本三十六人家集I・II中の小町集に就て——」(『国語と国文学』一卷一号、一九四六年八月)

片桐洋一『伊勢物語の研究』(研究篇)『明治書院、一九六八年』

角田宏子「『小町集』の形成——六歌仙時代より第三期形成期迄を中心

に——」(『日本文藝研究』四十四号、一九九二年四月)

角田宏子『小町集』海の歌の文芸性』(『日本文藝研究』四十六号、一九九四年十二月)

一九九四年十二月)